

季刊誌 C E L 5 1 号

「 C E L からのメッセージ 」

大阪ガス エネルギー・文化研究所副所長
安達 純

今年の7月に自死した文学者、文芸評論家の江藤淳氏の中期の作品に「夜の紅茶」と題する短い随筆がある。

「私は、夕食のあとでひと眠りしてから、紅茶を飲むのが好きである」という文章で始まるこの随筆には、江藤氏のある一面が色濃く出ている。

夕食の前にはウィスキーの水割りを1、2杯飲む。満腹して眠気をもよおして来ると、寝椅子に横になり、レコードを聴きながら1時間ほどぐっすり眠る。どんな眠りが愉しいとって、この眠りほど愉しいものはない。昼間の時間がどこかに消えてしまい、それと同時に、わずらわしい社会生活も千里の彼方に遠ざかってしまう。眼を覚ますと、2、3分寝椅子の上でぐずぐずしてから、シャワーをあびるか顔を洗うかする。そして、おもむろに夜の紅茶を飲む。紅茶の香りを味わっているうちに、眠気が少しずつ消え、頭が明瞭になりはじめ、やっと自分の時間がやって来たという、充ち足りた気分になって来る。なおも紅茶を味わい、その香りを愉しむ。すると、

いつの間にか、現在をさまよい出て、過ぎ去った日のことを考えたりしている。

「夜の紅茶」には、ざっとこんな世界が描かれている。

しかし、江藤氏にはそれとは180度ベクトルの違う、もうひとつの側面がある。国家や社会を真正面から論じた数多くの著作は、むしろ、「わずらわしい社会生活」に耐え、敢然とそれに立ち向かうことこそ人の務めである、という強い意志の下に書かれたものである。後者は江藤氏にとって、言わば「公」の領域に属し、その一方、「夜の紅茶」に代表されるような作品群は「私」の領域に属している。人は誰しも「公」と「私」の両方の世界を持ち、そのために、身体の中には異なる2種類の「時」が流れている。ところが江藤氏にあっては、この2つの「時」の流れの落差が極めて大きく、そのギャップを肌で感じる事が、氏の著作を読むことの魅力のひとつでもあった。

実質的に、江藤氏の最後の作品となった「妻と私」には、二人の間にどんな挟雑物も介在しない、純粹な「私」の世界が描かれている。江藤氏自身の「あとがき」によれば、氏の著作の中でこの本がいちばん大きな反響を呼んだという。

生涯の伴侶を失い、また自らも身体を壊して、精神的にも肉体的にも、これ以上「社会のわずらわし

さ」に耐えることができないと考えたとき、江藤氏はもうひとつの世界を自らの手で永遠に選び取った、のではないかと思えてならない。

「公」と「私」の世界を流れる「時」が隔絶したり、あるいは相反したりするのではなく、それらが互いに同調するような生き方は所せん不可能なことなのだろうか。恐らくそれは、容易に答えを見出せるものではなく、一人ひとりが一生を賭けて解いていくものであろう。

「CELからのメッセージ」は、本来は公的な場でなければならぬと思うが、今回は「時」という季刊誌CELの全体テーマに触発されて、私的な感想を述べさせていただいた。